

3.市民の国際交流

大棧橋には毎年、諸外国から八〇余隻の観光船・貨客船が訪れる。外国人船員の上陸数も他の港に比べて、かなり多く、五六年度の場合、東京の三・七倍、二七万三四〇〇人に達した。市内のホテルなどに泊まる外国人も年間延べ二万五〇〇〇人に及ぶ。

シルクセンター一階に設けられている横浜市観光協会の案内所には年間七〇〇〇〜八〇〇〇人の外国人が訪れ、観光案内、ホームビジット（日本人家庭訪問）のあつ旋などのサービスを受けている。ホームビジットをみると、五六年度では一二一件、延べ三四一人。このほか、日本人家庭との交流は多いと思われるが、こうした交流を通して得られる体験は、外国人にとって貴重なものであろう。

■盛んなグループ交流

横浜に足を踏み入れる外国人と市民の自主的なグループとの交流

も盛んに行われている。

たとえば「緑区国際交流協会」。開発がすすんでいる緑区には、外国人の滞在者や、かつての海外駐在員の家族、海外留学経験者が多い。「住民同士の親密感を強めていくと同時に、外国人・日本人の交流をすすめて、市民レベルでの国際親善を深めよう」と、五六年四月に発足した。会員は外国人、日本人を合わせて約八〇人おり、月二、二回行われる文化比較研究会を中心に、各種交流行事を開催している。

市教育委員会が開講した婦人ボランティア育成講座がきっかけとなって誕生したグループもある。「横浜国際交流ボランティアグループ」がそれで、海外技術研修生に日本語を教えたり、アフリカ・インドシナ難民の子どもたちを援助するためバザーを開催したりしている。

「国際交流を考える市民の会」は五一年四月に結成された。五〇年



異文化を知る“場”の一つ、ホームビジット

に市と県が国際交流「ヨコハマムーブメント」事業の一つとして、論文を募集。それに応募した人たちのグループである。国際港都横浜にふさわしい市民意識の形成に役立つ行事などを当面の課題とし、長期的には横浜独特の魅力を新たに創造するため、「国際学生村」づくりを考えている。

こうした交流のほか、外国人と地域住民との交流も行われてい

な横浜国際会議場が中区の産業貿易センターのなかに設置された。

■身近な国際会議場

五二年四月、中規模だが本格的

る。南区では横浜国立大学海外留学生会館の留学生を盆踊りに招待したり、中区にあるヨコハマ・カントリー・アンド・アスレチック・クラブでは地域の盆踊り大会にグランドを提供したりしている。

■求められる交流の場

このように市内では、さまざまな国際交流が幅広く行われているが、市民は国際交流についてどう思っているのだろうか。

ある調査によれば、国際交流について関心をもつ人の多くが観念

表-1 横浜国際会議場における主な国際会議 (昭和55年以降)

開催時期	会議名	主催者	参加国数
55.7.3~4	第1回日本文化デザイン会議		
56.7.14~17	アジア地域経済交流横浜会議	横浜市海外交流協会	8
56.10.29	第1回ヨーク・シンポジウム	横浜市海外交流協会	5
57.6.9~16	国連アジア太平洋都市会議	ESCAP, UNCHS, 横浜市	15
57.8.16~19	環境問題国際シンポジウム	神奈川新聞社	2
57.7.20~23	東西コミュニケーション会議	東京大学辻村研究室 ハワイ・イーストウエスト・センター	4
57.9.3~5	第2回ヨーク・シンポジウム	横浜市海外交流協会	3
57.11.22~23	緑の地球を守るシンポジウム	緑の地球防衛基金	7
57.11.27~12.3	国連大学神奈川セミナー	国連大学、神奈川県	17

世界各国の人たちが参加するシンポジウム、講演会、各種会議などが、ここを舞台に展開されている(表-1)。

五六年度に開催された国際会議は四七あり、このうち一般市民が参加したのは「よこはま女性の国際交流フォーラム一九八一」、「国際神奈川を語ろう」シンポジウムなど二五(五三%)を数える。四

七あった国際会議のなかには経済関係の専門的なものも含まれるが、その半数以上は市民参加の国際会議であった。このことは、この会議場が市民に身近なものであることを示しているといえよう。

わが国の貿易摩擦の要因の一つ

として異文化との交流の不足がしばしば指摘される。市民主体の国際交流は、そうした意味からも続けていかなければならない。市民の意欲とエネルギーをくみとり、交流の場をさらに提供していく。将来とも国際都市横浜の果たすべき役割は、極めて大きいといえよう。



国際会議場では市民参加の国際会議がよく開催される